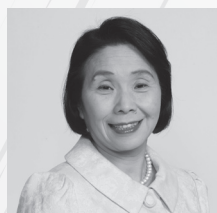


識者インタビュー 1

「令和の日本型学校教育」の理念を具体化 教員が子どもと向き合う時間を確保する

杏林大学客員教授／ルーテル学院大学客員顧問・客員教授 清原慶子



清原慶子（きよはら・けいこ）
東京工科大学メディア学部部長・
教授などを経て、2003年4月か
ら東京都三鷹市長を4期16年
務めた。民学産公の協働のまち
づくりを進め、「コミュニティ・
スクール」を基盤とした小・中・
一貫教育」を創始。中央教育審議
会委員（生涯学習分科会長・初
等中等教育分科会委員）、総務省
統計委員会委員などを務める。

文部科学省で長年にわたって議論されてきた公立小学校における学級編制の標準が引き下げられ、「35人学級化」が実現する。2003～2019年に東京都三鷹市長を務め、同市で「コミュニティ・スクール」を基盤とした小・中一貫教育」を創始した清原慶子氏は、文部科学省中央教育審議会「初等中等教育分科会」および「新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会」の委員として、35人学級化の議論に関わった。少人数学級化に関する議論の経緯や、期待される効果、現状の課題、実現にあたって管理職が果たすべき役割などについて、話を聞いた。

個別最適な学びの実現や 感染症対策の必要性が後押し

「35人学級化」の前提としてあるのは、「新

IGAスクール構想による1人1台コンピュータ端末の活用や、個別最適な学びと協働的な学びの対応にふさわしい学級規模として、35人学級が具体化しました。

さらに、授業の質の向上だけでなく、新型コロナウイルス感染症対策の必要性などから、少人数教育の実現が喫緊の課題として社会的に共有されるようになりました。政府の教育再生実行会議においても、感染症対策を踏まえつつ、「いかに子どもの学びを保障するか」について議論され、少人数学級の有効性が示されてきたと考えます。

三鷹市の取り組みによって 学力向上などの成果を上げた

35人学級の有用性を表すものとして、5月に開催された「今後の教職員定数の在り方等に関する国と地方の協議の場」で提出された資料の一部を15ページに示すとともに、自身の実体験に基づいて述べたいと思います。

まず1つとして、小・中学校時代の経験からです。私は私立の小・中一貫教育校に通い、学級人数は小学1年生時に16人、中学1年生時に32人と、少人数学級で育ちま

しい時代の初等中等教育の在り方」です。新学習指導要領や「令和の日本型学校教育」で示された理念を具体化するための学校現場に求められる要件の一つとして、35人学級化が実現したと、私はとらえています。

文部科学省では以前から、学級編制のあり方について議論が行われ、少人数学級のメリットや効果についても一定の知見が共有されてきました。2010年度に実施された「今後の学級編制及び教職員定数の改善に関する教育関係団体ヒアリング」では、学級編制の標準を40人から35人あるいは30人に見直すべきとの意見が大勢を占め、2011年度には初等中等教育局に「公立義務教育諸学校の学級規模及び教職員配置の適正化に関する検討会議」が設置され、私も委員として加わりました。

した。その中で、一人ひとりの個性が尊重され、その後の多様な進路選択に結びつき、友人関係も円滑であるなど、まさに少人数教育の効果を実感しています。

2つ目は、教員としての経験からです。私は、大規模校である慶應義塾大学を卒業し、同様に大規模学部といえる東京工科大学メディア学部の教授を務め、「少人数の演習やゼミナールなどの教育効果」を経験しました。一方で、常磐大学、ルーテル学院大学という、全国的にみて1学年の定員が少ない大学でも教員を務めました。規模が異なる大学教育の両方を経験し、いずれにおいても少人数のほうが一人ひとりにきめ細かな教育が実現できることを実感しています。

3つ目は、三鷹市長として小・中学校の円滑な一貫教育を促進し、成果を上げた経験からです。2006年度に創始した三鷹市の「コミュニティ・スクール」を基盤とした小・中一貫教育」では、習熟度別の少人数教育、市費負担による一貫教育を円滑化するコーディネーターの配置や小・中学校の教員の兼務発令などを実施しました。

三鷹市はそうした取り組みなどによつ

少人数学級編制はなかなか具体化されませんでした。近年、さまざまな要因が重なったことでその必要性和重要性への認識が高まり、このたびの法改正に至りました。要因の一つとして挙げられるのは、教員の働き方改革です。2017年度に設置され、私も委員を務めた「学校における働き方改革特別部会」では、教員の長時間労働の改善の目的と成果として、「いかにして教員が子どもと向き合う時間を確保すべきか」について、より積極的に議論されるようになり、そのための有効な方策として挙げたのが、学級編制の少人数化や小学校高学年における教科担任制の導入です。

また、「令和の日本型学校教育」でも示された、「誰一人取り残さない」ことを徹底するためにも有効だと期待されます。G

て、不登校児童生徒数が大きく減少し、東京都内の自治体で最も少ない人数で推移しています。「全国学力・学習状況調査」においても、三鷹市はすべての教科で東京都の平均点より高い傾向が表れました。

これらを一つの証左ととらえ、小中一貫教育や少人数教育は、一人ひとりの子どもに教育を行き届かせることや学力向上に一定の効果があると期待しています。

教員が力を発揮できるように 学校環境を整える必要がある

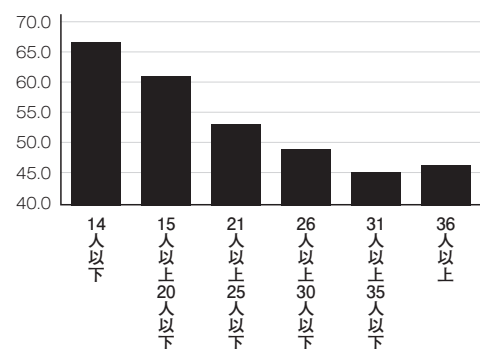
35人学級の成果は、学級経営を行う教員の力量にかかっています。管理職やミドルリーダーには、教員一人ひとりがその力量を最大限に発揮できるような学校環境づくりと必要な支援が求められます。

35人学級化の大きなねらいは、教員が一人ひとりの子どもの能力と個性をより見つけ、対話することができ時間や機会を増やすことです。それは管理職と教員の関係でも同じです。管理職には、一人ひとりの教員を今まで以上に丁寧に見つめ、その能力と個性を引き出すために、適切な指導・助言をすることによって、教員の資質能力

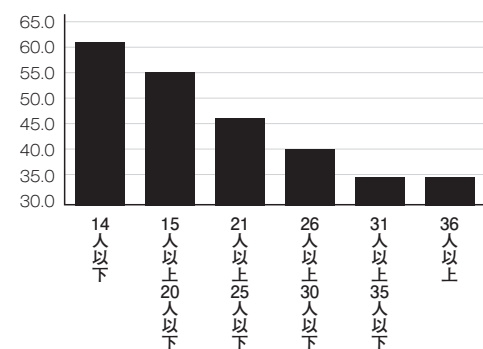
我が国における学級規模に関する研究事例

学級規模が小さいほど、①学習規律・授業態度が良い、②授業内容が高まる、③学習意欲が高まる傾向

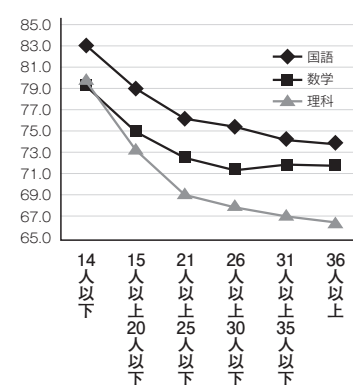
授業中の私語が少なく、生徒が落ち着いている学校の割合



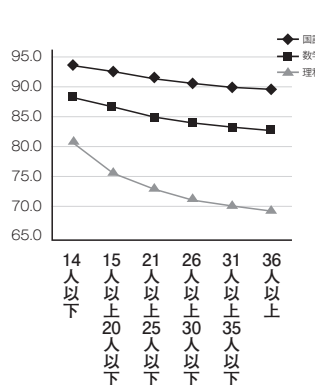
生徒が礼儀正しい学校の割合



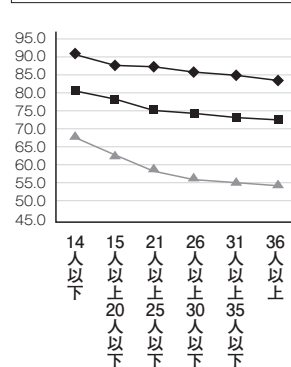
授業内容がよく分かったと答えた生徒の割合



勉強は大切だと思う生徒の割合



学習したことが将来社会で役立つと考える生徒の割合



「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数等に関する参考資料」より 出典：平成27年度全国学力・学習状況調査（中学校分）

映され、課題の一つとして答申に盛り込まれました。

さらに、この3月に中央教育審議会の第11期がスタートし、「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について」の諮問がありました。4月には「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会」が設置され、中教審の会長である渡邊光一郎さん自らが特別部会長を務めることになりました。そうしたことから、文部科学省が教員養成課程の改革に本気で取り組む姿勢を感じています。

また、その議事の中で市長経験者として、教育委員会事務局職員の重要性を含む「教育委員会と首長部局の連携の重要性」についても提案しました。それは、教育長や校長がリーダーシップを発揮しても、教育委員会でよい人材が適切に活躍するとともに、適切な研修を受けられるようにしなければ、学校教育の向上は望めないからです。

まずは35人学級の効果を
丁寧かつ十分に検証する

萩生田光一文科科学大臣は、今後、30人学級の実現につなげることを明言していま

の底上げを図ることが期待されます。

35人学級が定着し、成果が上がるまでには一定の時間を想定する必要があるでしょう。どの教員も、効果的な授業の手法を模索すると思います。管理職には、その過程を見守りつつ、教員の授業づくりを支えて、必要な対応を行うことが求められます。

特に、教員がさまざまな手法を試す中で失敗をしたときに、管理職はそれを責めるのではなく、学びながら修正していこう、成功例を増やしていこうといった意識をもち合うことが大切であり、そうした雰囲気

を学校全体につくる責任があると考えます。35人学級や1人1台端末の効果を発揮するために軽視できないのが、学校施設のあり方、教室の物理的環境のあり方です。

今後は、子どもが自在にグループ学習ができるとともに、ICTの活用を生かす授業の創意工夫が求められることから、情報通信環境の確保や柔軟な教室レイアウトが必要であり、教室環境をきめ細かく検証して指導・助言をするのも管理職の役割です。

他方で、これは一部ではありませんが、都市部の人口が増加している地域では、学校施設の拡充の制約があるため、少人数化に

向けた学級数の増加に対応できない状況も想定されます。その場合は、35人学級が実現するための適切な学校施設が整備されるように、校長は教育委員会や首長部局と協議していく責任があります。

都道府県格差や市区町村格差、あるいは同じ市区町村内でも学校の施設の違いによる格差などが絶対に生まれてはいけません。市長経験者としては、一人ひとりに行き届く教育を実現するために、授業力の向上や学級経営力といった「ソフト」の部分も大切ですが、それを実現するための舞台である「ハード」の部分もしっかりと整えていく必要があると、特に強く感じています。

三鷹市では、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの配置によって、子どもの学びや家庭の福祉的な面も含めた課題解決にも取り組み、一定の成果を上げています。管理職は、そういった教員を支える専門職や事務職員との信頼関係を強め、担任教員が学級経営により専念できるようにすることも必要だと思います。

特にコミュニティ・スクールを推進している学校では、地域住民や諸団体との連携が不可欠です。管理職は、学校を代表して、

地域の信頼を得るという重要な役割であることを認識してほしいです。

資質の高い教員の養成と
人数の確保が喫緊の課題

35人学級の実現により、教員の人数の確保および資質の高い教員を養成するための教員養成課程の改革が必要になります。これは大きな課題です。私は、2020年12月4日に行われた初等中等教育分科会の議論で、この課題について発言しました。

「令和の日本型学校教育」において、教員は「子どもの主体的な学びを支援する伴走者」と示され、「多様な人材の教育界内外からの確保」、そして「教師の資質・能力の向上による質の高い教職員集団の実現」が必要とされています。さらに、今後の課題として、「教員の資質向上と教員養成課程の充実が不可欠」と挙げられています。

私は、少人数教育の実現が喫緊の課題であるならば、「資質の高い教員の養成」と、何よりも「人数の確保」が求められると主張し、「今後の課題」の中に、「教員養成課程についてのさらなる検討の計画」を入れてほしいとお願いしました。その意見が反

す。私は、さらなる少人数学級化を検討する場合には、「子どもの視点」と「教員の視点」の両方をもつ必要があると考えます。

「教員の視点」に関して言うと、私は三鷹市長時代に、教育委員会からの「小1プロブレム」の問題提起を受けて、小学校1年生の1学期限定で、教育支援員を1人配置し、効果を検証しました。その結果、教員から、「入学当初に教室でなかなか落ち着かない児童に対しても目配り、気配りができ、一人ひとりの発達段階に応じた指導ができる」といった意見が聞かれるなどの効果が現れ、三鷹市では今もこの取り組みを続けています。

一方で、「子どもの視点」が重要です。以前に奈良県の小さな町で、複式学級の分校と通常学級の小学校が、週に1回、オンラインで昼休みの校内放送を共有するという事例について研究したことがあります。

その分校の子どもたちからは、「全校児童が少ないのはとても心細い」「いろんな人があるとと言われても、本当に出会ってみたいと実感できない」「週1回でも、同じ学年の子どもが町内にたくさんいるということを知るのは刺激だ」といった生の声を聞きま

した。そのときに、学校教育には一定の人数が確実に必要なのだと感じました。

とりわけ小学校低学年においては、35人よりも30人のほうが望ましい可能性が高いです。三鷹市での経験からは、そのような感覚があります。その反面、児童数が少なすぎることも望ましくないように思います。

そういったことを踏まえて、まず今回の35人学級の効果を丁寧かつ十分に検証したうえで、段階的に少人数化を進めていくことが有効と考えます。その際に忘れてはならないのが「子どもの視点」です。

少人数学級化に限ったことではなく、私たちは「子どものことを子どもの意見なしに決めることがない」ように努めたいと思います。学級人数適正化についても、可能な限り児童生徒の視点に立った調査や検証がなされることを期待しています。

多様性を受容できる

子どもの成長を支えていく

現代の子どもたちは、生まれながらに多メディアの時代を生きています。学校も、教科書とノートと黒板で学んでいた時代と比べて劇的に変化しました。それに伴い、

主体的に時間管理をして、自身の興味・関心を伸ばしながら、何をすべきか、何を学ぶべきかを考えて選択することが、児童や園児にも求められるようになっていきます。

そこで教員や保護者には、いかにして子どもたちの総合的な発達を支援することができかが重要です。今後は、教科学習だけでなく、子どもたちの生活時間の適切さ、健全性といったことにも重点を置いた総合的な教育力が、より必要になると考えます。

Society 5.0の時代に、誰一人取り残さない教育を実現するためには、子どもたちにも多様な他者を受容できる力が必要だと思いますので、学校教育現場には、多様性が受容され、多様な意見が尊重される環境づくりが求められていると考えます。

そうした中で子どもたちは、教科書や本、デジタル情報と実体験から得られるもののバランスをとり、考える力を培い、自分なりの幸せや生きがいを見つけていけるようになるでしょう。それを家庭・地域と連携して支援するのが、「伴行者」である教員です。こうした学校教育の実現のために、管理職の力量、創意工夫と率先垂範が求められています。ご活躍を期待します。